

第 21 号

発行日 令和3年3月19日
 発行者 〒036-8561 弘前市文京町3
 工学部同樹会(工学部内)
 題 字 同樹会長 千葉 信行
 印刷所 (株) 笹 軽 印刷

工学部同樹会報



「縁とは不思議なもの」

早川 博文

(昭和五十七年 理学部数学科卒業)

私は北海道の標茶町という人口よりも乳牛の数が多いい町の酪農家に生まれました。子ども頃から算数・数学が好きで、家業は継がなくても良いと言われ、弘前大学理学部数学科に進学しました。

弘大での思い出は多々ありますが、まず数学科でのクラス観桜会。今はもう禁止になっているのでしようが、「出身」というイベント、クラスにいた寮生の指導のもと全員が行い、一人一人の心の垣根が取り払われたように卒業後も何度もクラス会を行うようなクラスになったと思います。このクラスの卒業生の半数以上が大学・高校・中学校で教鞭をとっています。次に、その当時、数学科の伝統となっていた三年生が一年生に行う、柴田敏男さんの「集合と位相空間」の「集合」の分野の自主ゼミに参加させていただき、数学は疑問を持って、自分で深く考えることが大切だと教えていただいたこと。それから、

弘大祭にクラスとして毎年参加し、二年生の時は数学展を企画し、多くの方に数学に触れてほしいと思い、数学パズルや数学の啓蒙書やメビウスの帯・魔方陣の制作コーナー、クラインの壺の疑似模型展示などを行ったことです。

四年生のときは、畠山洋二先生の幾何学のゼミに所属し、立花俊一さんの「リーマン幾何学」を利用し、協働しながら深い学びを得ることができました。畠山先生の一番の思い出は、自作された手書きのテキストを配って講義されたことです。作られたテキストは、先生独特の筆跡で書かれたとても味わい深いもので、出版すればすぐに書籍になるレベルの内容だったと思います。私は今でも大切に保存しています。先生はご自分の研究が素晴らしいだけでなく、学生の教育にも研究と同じくらい情熱を傾けられた傑出した方でした。弘大での楽しく充実した四年

間は、あっという間に過ぎ、北海道の公立高校数学教諭として採用になりました。北海道では、延べ九年間農業高校と普通高校で勤務をしていましたが、個人的な理由で青森県の採用試験を受けて採用になり、二十八年間工業高校、普通高校、農業高校に勤務し定年退職となりました。

青森県の教員として勤務したときは特に、弘大との縁は深く、同僚も弘大卒が多く、懐かしい話を交わすことができ、仕事の面でもプラスになることが多かったです。また、教員の研修会や研究大会などで大学時代の恩師にお目にかかれたり、お話を伺う機会を得ることができたり、免許状更新講習でお世話になったりしました。それから、自分の教え子たちも弘大でお世話になり、教員・公務員・医師・医療関係者・地元企業などで活躍している姿をみることで、教員としての醍醐味を味わうことができました。

定年ということで一区切りついたのですが、縁があり、一昨年は工業高校の非常勤講師を勤めました。昨年は元同僚から、弘前大学理学部同樹会副会長山上先生が講義されていた弘前大学理学部数物科学科三年生対象の数学科教育法、授業論を引き継いでやってみないかとの

御連絡をいただきました。山上先生からは貴重な資料やアドバイスをいただき、荷が重かったのですが非常勤講師として教育学部の田中義久先生のお世話になりながら務めています。

大学で学生に授業をするのは初めてですが、自分も弘大でお世話になり、今の自分があると思っているので、志を持って教員を目指している学生達に、自分が経験してきたもの、もっとうすれば良かったと考えたことを少しでも伝えられたらと思っています。また、学生に伝えることで自分自身が流されて深く考えていかなかったことなど、改めて勉強する機会になり、とても有意義な生活を送ることができています。コロナ禍もあり、令和二年度は前期を中心にリモートの授業を初めて行いました。その効果はいろいろあると思いますが、私はやはり人と人との触れあいが教育の原点で、その良さは時代が変わっても変わらないと思っています。最後になりますが、山上先生から同樹会の幹事のご依頼があり微力ながら協力させていただきましたことになりました。私と弘前大学の関係がこんなに長く続くとは入学当時は夢にも思いませんでした。今後ともよろしくお願いたします。



定年退職教員

令和二年度末をもって、数物科学科 中里博教授、物質創成化学科 澤田英夫教授、地球環境防災学科 小菅正裕教授、電子情報工学科 長瀬智行准教授の四名の先生方がご退職されます。ご退職の先生方におかれましては、永年にわたる教育研究活動、及び同樹会に対するご尽力に対し厚く御礼を申し上げますとともに、今後益々のご活躍と同樹会への変わらぬご支援を宜しくお願い申し上げます。なお、先生から本学部における様々な思い出や出来事に纏わるお言葉を頂戴しました。



退職にあたって
思いつくぶその頃の頃

理工学研究科
(数物科学科)
中里 博



弘前大学に赴任して丸二十八年となり、退職に当たって思い浮かんだ事を少しばかり紹介させて頂きます。感染症の内外での拡大により、これまで当たり前のように出ていた海外への出張が出来なくなったり国内で懇親のための開催されていた会食の機会がほぼできなくなって、思い浮かぶ楽しいシーンとしては、ワイワイガヤガヤと新入生の歓迎行事や卒業間近な学生たちと「追出しコンパ」で盛り上がったことや、外国の研究者と研究会の際のバンケットでとりとめもなく会話したことがあります。

仕事本体のことで理工学部や理工学研究科に関する私の記憶に強く残っていることとしては、二〇〇四年(平成十六年)四月に大学院理工学研究科博士後期課程が、国立大学法人の発足と時を同じくして設置されたことです。これに関して思い浮かぶものは、公式の専攻や研究分野ということではありませんが、私自身の研究領域である数学ないし数理科学の分野で、この後期課程を指導された教員や、数学またはその近接領域で、この課程を修了し博士の学位を得て巣立っていった五名の方の顔です。

現在、香港理工大学に勤務されている中国系豪州籍の女性教員の陳小君 (Xiao-Jun Chen) 先生のもとに、二〇〇五年四月から一年に一名ずつ、現在中国の北京交通大学に勤務されている張超 (Zhang Chao) さん、現在サウジ・アラビアのキング・ファイサル大学に勤務されているサイエド・ムハマド (Sayed Mahmoud) さん、そ

して現在佐賀大学に勤務されている木村拓馬さんが入学され、それぞれ三年の期間で博士の学位を取得し修了されました。陳教授が、博士後期課程の数理部門の推進役を果たされました。陳教授の香港転出にともない、二〇〇八年の四月からピンチ・ヒッターのような形で私が二名の学生さんたちの主指導教員となりました。数値解析やその工学的応用といった分野の学生さんで、隣接分野を研究する身とは言え、私がうまく学生さんたちを指導していけるの不安もあったことを思い出します。転出後も学生たちと連絡を密にとり、短期に弘前にも来て指導された陳先生の絶大な影響力を持って二名の研究は順調に進展し、私自身は型通り研究の進展を確認することや審査を厳格に行うこととなりしました。それはその後の博士後期学生の指導をする上での財産となりました。

木村さんが、二〇一〇年の三月に修了の後、数理部門では暫く間があきましたが、

二〇一三年の十月に金正道教員のもとに、現在東京都立大学に勤務されている小笠原悠さんが入学されました。順調に研究を進め、学位を所得し、弘前大学大学院医学研究科での勤務を経て現職に就かれています。二〇一五年の四月には、中里のもとへ、台湾より、現在、台北の光学機器メーカーのブライトン・オプティクス (Brighten Optix) 社で研究員として勤務している、黄鵬瑞 (Hung Peng-Rui) さんが、まず研究科研究生として入学し、翌年に後期課程に入学しました。研究成果の発表で、米国のアイオワ州、ベトナムのダナン、台北、京都などに一緒に行ったのが大変良い思い出です。三年で学位を取得し、現職に就かれています。旅慣れている彼が、米国の飛行機の中で、「この緯度の領域を飛んでいるときは、気流の影響でよく飛行機が揺れる」と語っていて、よく飛行機を使っている経済的にも少し余裕のある様子が印象的でした。在学中は、「菜

根譚」という有名な中国の古典を読むなど、彼は文化や日本語にも強い興味を持っていました。また彼の堅実な生活ぶりに好感が持てました。そのような興味と仕事結びついても、あるいは今後あるかも知れません。現在、数理工部門の六番目にあたる後期課程の一年目の学生さんが在籍し研究をしています。きっと良い成果を挙げるものと期待しています。

博士後期課程に関しては、数理分野以外の学生さんと授業で出会い、共著の論文を書いたことも何度かあり良い経験でした。マレーシアから来られて機械系の分野を専門分野としていたアミール・ムクリーズ・アズマン(Amir Mukhriz Azman)さんと、二〇一七年に太陽系モデルについての数理に関連して、イスラムの聖典には天文学的な知識に関してどのような言及があるかを論文の数か所にて聖典からの英訳で紹介しました。論文で、イスラムについて言及することはかなり微妙

でもありますので、論文の表題や節の名前で、イスラムやコーランという用語を直接的には使わないことにしました。ともあれ、聖典には例えば、地球上から見て恒星系に関して、「月や太陽は、西から東に進むがその速さで、太陽は月に追いつかないのは神の定めである」、と言ったことが書かれています。アズマンさんからの情報で最も感心したことは、聖典の中で「偶数につけても、奇数につけても」と語られている箇所解釈です。イスラム文化研究の泰斗である井筒俊彦氏の翻訳での注釈では、これは何を言っているのか分からないとありました。この箇所の意味を彼に聞いたところ明瞭に答えてくれました。一平均朔望月は約二九・五三日であり、太陰暦では、一月が二十九日または三十日で、イスラム世界では、新月の観測で月の始めを決めているが結局「その年のラマダンが偶数の三十日となるか奇数の二十九日となるかは深淵で神のみぞ知る」

と言う趣旨を述べているということが分かりました。知識や学問が実生活と結び付くと良くその本質を理解できるということなのでしょう。さて、冒頭で「ワイワイガヤガヤ」と述べましたが、そこでどんな楽しいことが語られたかについては紹介致しませんでした。それについては、感染症の収束の後、直接またお話する機会もめぐってきましょう。同樹会会員皆さまの御多幸と会の益々の発展を祈って話を閉じることになります。

弘前での研究の回想

理工学研究科
(物質創成化学科)
澤田英夫



弘前大学に二〇〇二年十月一日付けで着任をさせていただいた当時の様子が今でも鮮

明に思い出されます。前任は奈良高専でしたので関西からこちらへ着任した当時、いろいろ異なることが多く戸惑いもありました。ただ、着任前に研究指導していた奈良高専専攻科生が本学大学院博士前期課程に入学し小職の研究

生八名、博士前期課程修了生六十名(内、一名は社会人、一名は留学生、一名は修業年限短縮学生)および博士後期課程十八名(内、七名は社会人、三名は留学生、二名は修業年限短縮学生)です。

前期課程に入学し小職の研究の立ち上げに協力していただき大変助かりました。研究室に新たに配属された学部四年の四名の卒研生とともに二〇〇三年四月に研究をスタートさせました。なお、奈良から最初に博士前期課程に入学した学生には八年間(高専五年次における一年間の卒業研究、専攻科二年間の研究指導、博士前期課程での二年間さらには博士後期課程での三年間)研究指導を行ったことになり、その学生の進路に多大な影響を及ぼしたのではないかと、今でも思い出されております。お陰様で弘前大学では八十六名の学生(二〇二二年三月に卒業もしくは修了予定の学生を含む)のみなさんに在籍をしていただきました。内訳は学部卒研

弘前での研究をスタートさせるにあたっては意外性が多々ありました。弘前へ移動して直ぐ、高分子学会の東北支部講演会が弘前大学で開催され、その懇親会の席である企業の方との雑談のなかで安定性の高い金属ナノ粒子の開発は市場性が高い等の話題が出されました。これは、遡ること小職が学部四年の卒研の時のことです。当時、小職が所属していた研究室は三階にありましたが、同じ研究棟の四階に永井洋一郎先生(当時、永井教授は有機ケイ素化学の分野では世界的にも著名な先生でした)の研究室がありました。永井先生は夕方になると三階の小職の研究室にお越しになり、学生と雑談される機会が時々ありました。そのとき、小職に対しても、

「君、遷移金属錯体を触媒に用いた有機合成化学では、組合せ」が最も重要である」ということをよく強調されました（小職の当時の卒研のテーマは遷移金属錯体を触媒とした有機合成反応でした）。「全く進行しない反応でも、君が意味もなく偶然使用した触媒で収率一〇〇%近くになる反応が発見できるかもしれない。だから、実験は面白い。君も手を汚すことを嫌ってはいけない」とよく言われました。このことを、ふと思いつき、弘前では含フッ素高分子集合体をホストとし、種々の金属ナノ粒子等のゲスト分子をそのホスト内へカプセル化させることにより新しいタイプの含フッ素ナノコンポジット類の創成が可能となることが脳裏に浮かびました。当時の永井洋一郎先生のコメントのようにこのホストに対するゲスト分子の組合せは無限にあるため、得られる含フッ素ナノコンポジット類の機能も無限にあるはずと考え、弘前ではこれをテーマに研究室の

学生の研究指導を行いました。この研究の展開は、今までの自分の経験のみに基づいて学生を指導するものではありません。常に新たな組み合わせから産み出される結果には、従来の常識では考えられない意外性を持つものが多い、学生の研究指導においては従来の知識だけではなく、新たな結果に対する考察力を強調し研究指導を行ってきました。

このように、研究の新たな展開には人と人との出会いが重要で、その出会いを如何に自分のものにできるかが重要であり、そこにはセレンディピティがあります。今まで、ここ弘前でこのような姿勢で研究を遂行できたのも研究室に在籍した学生みなさんの献身的な努力の賜であります。最後に、このような研究環境を与えて頂いた弘前大学にこの場をお借りし深謝いたします。



地震波を探って四十年

理工学研究科

(地球環境防災学科)

小菅 正 裕



一九八一年から四十年間にわたって、理学部および理工学部でお世話になりました。

その多くの期間は附属地震火山観測所の教員として、地震観測をベースにした教育と研究に携わってきました。地震の観測と研究は、発生した大きな地震の影響を受けます。

地震火山観測所ができた二年后に一九八三年日本海中部地震が発生しました。観測所は震源に最も近い観測網からのデータを提供して、全国の研究者に認知されるようになりました。一九九五年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）をきっかけに全国的な地震観測網が整備され、大学での観測は臨時観測に重点を置く方

向にシフトしました。私自身も多くの地震の余震観測に出かけました。二〇一一年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は地震研究者に大きな衝撃を与えました。私の研究は地震波から震源や地下構造に関する情報を探ることですが、そのような研究が災害軽減に何の役にも立たなかった無力感に苛まれながらも、地震を理解することを地道に続けるしかないと考えて研究を続けてきました。

地震学のレベルはこの四十年で確実に上がりました。かつては震源を速く正確に決めることができず、青森県西海岸からそれほど離れていない場所の地震に日本海中部地震という変な名前が付きました。現在では震源が自動的に決まって、緊急地震速報が揺れの到来を教えてくれます。

しかし、根本的な問題、例えばなぜその場所に地震が発生したのか、ということはまだにわかっていませんので、今後の研究の進展に期待しています。

二〇二一年二月二十七日の最終講義の後で、オンラインでのお祝いの会を開いてもらいました。参加者の多くは一九八〇年代〜九〇年代の卒業生でした。当時は私も若かったということもありますが、講座という単位で学生と教員のまとまりがあった、名簿を作るなど学生の活動が活発だったということが大きいと思います。個人情報保護と同窓会活動の両立は難しいですが、オンライン活動を取り入れるなどして、同樹会活動も新たなステージに入る時かと思えます。私もそれですながついていければ嬉しく思います。これまで同樹会にお世話になったことに感謝するとともに、今後の発展を祈念いたします。



理工学部と理工学研究科の就職状況

令和二・三年度
理工学部就職対策委員会委員長

黒川 敦

理工学部／大学院理工学研究科博士前期課程の就職率は、令和元年度（令和二年三月卒業／修了）が九八・六％／九八・九％、平成三十年（平成二十九年）が九八・一％／一〇〇％、平成二十九年（平成二十九年）が九八・一％／一〇〇％／九九・〇％です。理工学部の大学院進学率は令和元年度が三四・三％、平成三十年（平成二十九年）が四〇・〇％、平成二十九年（平成二十九年）が三九・二％です。

令和二年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの企業で説明会や面接をWEBで実施することになりました。日本経済団体連合会による二〇二〇年九月アンケートの結果では、約九割がWEB面接を実施しています。また、日本経済団体連合会が発表した二〇一八年度の「企業が選考時に重視する要素」の調査結果では、コミュニケーション能力が十六年連続一位となっています。今までの対面による面接と違い、

カメラ越しの正面のみの二次元画像で如何にコミュニケーション能力が高いと判断してもらえるかがポイントになります。平面画像の見栄え（カメラ位置、背景、服装や光源など）やマイクの感度、さらには映像や音声が途切れたときの対応などにより、面接官に与える印象は大きく異なります。コロナ禍により、従来になく就職活動となりました。

就職対策委員会では、オンライン授業で大学に來られない令和二年度卒業／修了予定者に対して求人情報をWEB掲載やメールにて周知するとともに、就職に苦慮している学生にはキャリアセンタールのキャリアアドバイザーに相談するよう促しました。理工学部／大学院理工学研究科の令和二年度の就職内定率は秋口まで大幅に落ち込んでいたが年明けの段階で例年の同時期の内定率に近づいてきました。また、令和三年度卒業／修了予定者を主対象とした就活総まとめ講座、OB・OG講演会、選考対策講座を実施し、学部一年生を主対象とした博士前期課程修了生による就職ガイダンスも開催しました。選考対策講座ではWEB面接対策もお話ししていた

できました。キャリア教育の授業として、学部一年生対象の「キャリア形成の基礎」と学部三年生対象の「キャリア形成の発展」を開講しています。令和二年度より、「キャリア形成の基礎」の授業回数を従来の二倍（一単位から二単位）にし、学部の教員が担当することになりました。内容は、学長・理事・学部長の講話、働くことを考える、ワークルールの基礎知識、就職情報会社による適性検査、県内企業四社を招いての講話、学部四年生と博士前期課程の在生による講話などです。これからの大学生活や就職に必要な様々な情報を得ることができま

令和元年度の理工学部卒業生の進路集計を表1に、大学院博士前期課程修了生の進路集計を表2に示します。就職先の企業名など詳細につきましては、理工学部／大学院理工学研究科のホームページや教育推進機構キャリアセンタールのホームページ（URLは表2の下に記載）でもご確認いただけます。今後とも大学・学部として学生の就職活動をしっかりとサポートしていく所存です。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

表1 令和元年度（令和2年3月）理工学部卒業生の進路集計

	数物科学科	物質創成化学科	地球環境防災学科	電子情報工学科	機械科学科	自然エネルギー学科	地球環境学科	知能機械工学科	合計
進学	28	19	9	22	32	7	0	1	118
農業・林業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
建設業	1	3	9	2	6	1	0	1	23
製造業	3	7	1	6	14	1	0	2	34
電気・ガス・熱供給・水道業	2	0	1	1	2	5	0	0	11
情報通信業	11	3	8	17	3	2	0	0	44
運輸業・郵便業	0	0	2	0	0	0	0	0	2
卸・小売業	3	3	0	1	0	0	1	0	8
金融・保険業	3	3	1	3	0	0	0	0	10
不動産業	1	0	0	0	0	0	0	0	1
飲食・宿泊業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
医療・福祉	0	0	0	0	0	0	0	0	0
公務員	10	3	19	0	5	7	0	0	44
教員	5	0	1	0	0	0	0	0	6
その他の産業	7	2	9	0	3	5	0	0	26
未就職・その他	4	1	2	4	4	2	0	0	17
計	78	44	62	56	69	30	1	4	344

表2 令和元年度(令和2年3月)大学院博士前期課程修了生の進路集計

	数理学 コース	物理学 コース	物質創成 化学コース	地球環境学 コース	電子情報 工学コース	知能機械 工学コース	新エネルギー 創造工学コース	合計
進 学	1	0	0	1	0	0	1	3
建 設 業	0	0	0	1	0	1	0	2
製 造 業	1	8	16	1	3	24	1	54
電気・ガス・熱供給・水道業	0	1	0	1	0	3	0	5
情 報 通 信 業	1	3	0	0	11	1	0	16
運 輸 業 ・ 郵 便 業	0	0	0	0	0	0	0	0
教 員	0	3	1	0	0	0	0	4
公 務 員	0	0	0	0	0	0	0	0
そ の 他 の 産 業	0	0	2	6	0	1	0	9
未 就 職 ・ そ の 他	0	1	0	0	1	0	1	3
計	3	16	19	10	15	30	3	96

理工学部／大学院理工学研究科ホームページ
<https://www.st.hirosaki-u.ac.jp/>



教育推進機構キャリアセンターホームページ
<https://www.hirosaki-u.ac.jp/shushoku/index.html>



令和元年度 理工学部卒業・理工学研究科修了 祝賀会

例年通り、令和元年度学位記授与式と同日の令和二年三月二十三日に、令和元年度理工学部卒業・理工学研究科修了祝賀会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、令和二年三月五日の同樹会幹事会におきまして、社会へ羽ばたく新同樹会員へのエールを送れず大変残念ではありますが、祝賀会の中止を決定いたしました。なお令和元年度学位記授与式は、来場者の制限など感染防止対策を徹底し、簡素化して開催されました。

学 生 表 彰

理工学部学生、理工学研究科大学院生は、日々研究活動に努力しています。特に、学会等からの表彰を受けた学生は以下のとおりです(令和二年二月以降)。今後とも学生の活躍にご期待ください。

■理工学研究科博士前期課程 (知能機械工学コース)
 西川陽樹(二年)
 二〇一九年度日本エネルギー学会 奨励賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (電子情報工学コース)
 葛西孝己(二年)
 令和元年度電子情報通信学会 東北支部 優秀学生賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (物質創成化学コース)
 佐々木俊太(二年)
 日本セラミックス協会第33回 秋季シンポジウム 奨励賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (知能機械工学コース)
 太田風輝(一年)

生体医工学シンポジウム 2020 ポスターアワードを受賞

■理工学研究科博士前期課程 (電子情報工学コース)
 金澤道和(二年)
 第39回日本医用画像工学会 大会奨励賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (地球環境防災学コース)
 佐藤亜樹(一年)
 二〇二〇年度日本質量分析学会 同位体比部会 優秀口頭発表賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (知能機械工学コース)
 田中宏享(一年)
 日本燃焼学会第58回燃焼シンポジウム「美しい炎」の写真展 優秀作品賞を受賞

■理工学研究科博士前期課程 (知能機械工学コース)
 中元崇人(二年)
 日本燃焼学会第58回燃焼シンポジウム ベストプレゼンテーション賞を受賞



令和元(2019)年度 弘前大学理工学部同樹会決算書

令和2年3月31日

◆一般会計

収 入	支 出	繰 越
5,236,265	699,983	4,536,282

◎収入の部

(円)

項 目	予 算 額	決 算 額	差 額	摘 要
繰 越 金	4,056,262	4,056,262	0	平成30年度より
会 費	1,500,000	1,180,000	△ 320,000	正会員 118人 〔 学部 1年 (2年度入学) 62人 620,000円 〃 1年 (元年度入学) 30人 300,000円 〃 2年 1人 10,000円 〃 3年 0人 0円 〃 4年 20人 200,000円 院生 1年 3人 30,000円 〃 2年 0人 0円 〃 後期課程 2人 20,000円 〕
卒業・修了祝賀会当日会費納入分	75,000	0	△ 75,000	新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止
雑 収 入	100	3	△ 97	預金利息
計	5,631,362	5,236,265	△ 395,097	

◎支出の部

(円)

項 目	予 算 額	決 算 額	差 額	摘 要
弘前大学同窓会費	252,000	252,000	0	令和元年度負担金
印 刷 費	285,000	247,500	△ 37,500	会報第20号 1,500部
卒業・修了祝賀会費	351,000	0	△ 351,000	新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止
写 真 代	0	0	0	卒業・修了祝賀会記念写真代
通 信・運 搬 費	50,000	39,230	△ 10,770	加入案内送料 (研究科新入生) (4,690円) 未加入者へ加入案内送料 (学部4年) (32,760円) 会報送料他 (1,780円)
会 議 費	10,000	590	△ 9,410	
事 務 費	120,000	120,000	0	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消 耗 品 費	20,000	18,948	△ 1,052	ラベル用紙、封筒他
郵便振替払込料	27,000	21,715	△ 5,285	会費払込手数料 (118人)
予 備 費	4,516,362	0	△ 4,516,362	
計	5,631,362	699,983	△ 4,931,379	

◆特別会計

収 入	支 出	繰 越
5,001,559	0	5,001,559

◎収入の部

(円)

項 目	予 算 額	決 算 額	差 額	摘 要
繰 越 金	5,001,133	5,001,133	0	平成30年度より
雑 収 入	500	426	△ 74	預金利息
計	5,001,633	5,001,559	△ 74	

◎支出の部

(円)

項 目	予 算 額	決 算 額	差 額	摘 要
特 別 事 業 他	0	0	0	
予 備 費	5,001,633	0	△ 5,001,633	
計	5,001,633	0	△ 5,001,633	

令和2(2020)年度 弘前大学理工学部同樹会予算書

令和2年4月1日

◆一般会計

◎収入の部

(円)

項 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	摘 要
繰 越 金	4,536,282	4,056,262	480,020	令和元年度より
会 費	1,400,000	1,500,000	△ 100,000	正会員 140人×@10,000円 〔 学部 1年 100人 〃 2年 5人 〃 3年 5人 〃 4年 20人 院生 10人 〕
卒業・修了祝賀会当日会費納入分	75,000	75,000	0	30人×@2,500円
雑 収 入	100	100	0	預金利息
計	6,011,382	5,631,362	380,020	

◎支出の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
弘前大学同窓会費	252,000	252,000	0	令和2年度負担金
印刷費	266,500	285,000	△18,500	会報第21号 1,300部×@205円
卒業・修了祝賀会費	351,000	351,000	0	130人×@2,700円
写真代	0	0	0	
通信・運搬費	50,000	50,000	0	加入案内送料(研究科新入生) 100人×@120円 加入案内送料(学部学生4年) 250人×@140円 会報送料他(3,000円)
会議費	10,000	10,000	0	
事務費	120,000	120,000	0	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消耗品費	20,000	20,000	0	ラベル用紙、封筒他
郵便振替払込料	36,600	27,000	9,600	会費払込手数料 150人×@200円 郵送通知料金 60通×@110円
予備費	4,905,282	4,516,362	388,920	
計	6,011,382	5,631,362	380,020	

◆特別会計

◎収入の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
繰越金	5,001,559	5,001,133	426	令和元年度より
雑収入	500	500	0	預金利息
計	5,002,059	5,001,633	426	

◎支出の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
特別事業他	0	0	0	
予備費	5,002,059	5,001,633	426	
計	5,002,059	5,001,633	426	

編集後記

平成十七年度より幹事を務めております一條です。

一面の早川先生のご寄稿からは、在学時や卒業後の想いを次の世代へ繋ぐお気持ちを読み取れます。また、同寄稿と、二、四面の定年退職の先生方のご寄稿からは、人との触れ合い、近接での言葉のやり取りや共同作業の大切さを、コロナ禍の中で改めて痛感する次第です。

五面の黒川就職対策委員長のご寄稿からは、従来にはない就職活動に向かう学生のご苦労が読み取れます。その中でも六面にあるとおり、学生は勉学において活躍しております。

今号ではコロナ禍に伴い、紙上職場訪問はお休みとし、また大変残念ながら、卒業・修了祝賀会を中止とした旨をお知らせいたしました。一方でコロナ禍後を見据え、小菅先生ご寄稿中のご提言のとおりに、オンライン同窓会の可能性を模索する時期にきていると思います。

新時代の同樹会に向け、会員ならびに会運営にご協力くださる皆様方からのアイデアやご協力をお寄せいただければ幸いです。

役員一覧

会長 千葉信行
副会長 山上佳男
幹事 早川博文
(元弘前高校教員・理工学部非常勤講師)

一條健司
(理工学研究科助教)

芹田美穂子
(弘前大学生生活協同組合職員)

荒木宏孝
(理工学研究科教育研究支援室・副室長)

須藤勝弘
(総務部付技術専門職員・情報連携担当)

名譽会長 佐藤裕之
(理工学研究科長・理工学部長)

顧問 加藤博雄
(前理工学研究科長、弘前大学名誉教授)

宮永崇史
(元理工学研究科長)

吉澤篤
(元理工学研究科長、理事(企画担当)、副学長)

稲村隆夫
(元理工学研究科長、弘前大学名誉教授)

(敬称略)

事務局

弘前大学大学院理工学研究科 一條健司

住所：〒036-8561

弘前市文京町三

電話：0172-39-3660



E-mail: keng@hirosaki-u.ac.jp

URL: http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/~doju/